子どもの表現活動につながる実践的授業の一考察：音楽表現と造形表現の視点から

A Study on Practical Classes Leading to Children's Expression Activities: From the Viewpoint of Musical and Artistic Expression

キーワード：保育、表現、演習
Keywords: Childcare, Expression, Exercise

三好　優美子　　渡邊　洋
MIYOSHI Yumiko　　WATANABE hiroshi

1. 研究の背景と目的

幼稚園教育要領および保育所保育指針が2017年3月に告示され改訂されたことに伴い、幼稚園教諭養成課程及び保育士養成課程も改訂された。幼稚園教諭養成課程では、従来の教職課程にあった「教科に関する科目」が、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」内の「イ.領域に関する専門的事項」へと変更された。また、保育士養成課程では、「保育の表現技術」が「保育の方法・内容に関する科目」へと変更された。これにより各大学等においてカリキュラムの変更がなされることとなった。

T短期大学では、保育士養成課程の「保育の方法・内容に関する科目」として、2019年から「子どもと表現」が新設された。2020年度からは、カリキュラム変更により幼稚園教員養成課程における「領域に関する専門的事項」の科目となる予定である。

保育教諭課程養成研究会（2017）は「領域に関する専門的事項」について、「領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本」としている。本研究の目的は、カリキュラム変更を機に授業実践を振り返り、受講者が領域「表現」の基盤となる考え方を得られたか、到達目標の達成度から確かめるとともに、実践的授業を通してどのような学びと課題を得たかを探り、今後の授業改善の手掛かりを得ることである。

2. 研究方法

2−1. 方法

（1）授業を実践する。今年度の「子どもと表現」の授業は、初回に合同ガイダンスを行い、その後7回ずつ、音楽表現と造形表現の2名の担当者でオムニバス授業を行うものであった。授業内容は表1のとおりである。

音楽表現領域で受講者に伝えたい内容は、「表」と「現」の意味合いである。平田（2010）が「表」は「子どもに寄り添って聴く耳をもつことで成り立ち」、「現」は「内面な変化を自分以外の人が感じ取って（読み取って）くれることで成り立つ」と述べているように、お互いの表現を受け止めあう活動を促しながら継続していく。

造形表現領域で一貫して継続することは、「見ること」「触ること」「感じること」を根気よく促すことである。造形的な演習では、自分なりの形と色、方法に気づくことを狙いとしている。この中で、素材や空間、時間など活動環境の多様性について可能な限り解説を施していく。

表1 「子どもと表現」の授業内容

科 目 名	子どもと表現

【授業の目的・ねらい】
音楽表現および造形表現における実践を通じて豊かな感性を養い、子どもが表現を楽しみながら生き生きと活動できるよう、子どもの発達や個性にふさわしい援助を理解する視点を獲得し、保育者として必要な知識・技能および表現力を身につける。

【授業の概要】
保育所保育指針における領域「表現」の保育内容やその位置づけについて理解する。子どもの発達、子どもが表現する姿、表現を促す要因等について実践的に学び、子どもの感性や創造性を育むための知識・技能・表現力を身につける。

【授業の到達目標】
1. 領域「表現」の位置づけや内容について実践を通して理解する。
2. 子どもの表現する姿や、その発達について理解する。
3. 表現活動を横断的に捉えながら、子どもの表現を支えるための感性を豊かにする。
4. 自由に表現し、人の表現を受け止め、共感することができる。
5. さまざまな表現の基礎的知識や技能を生かし、子どもの表現活動に展開させることができる。

【授業計画】

回数	テーマ	
第1回	領域「表現」のねらい及び内容の理解…子どもの発達段階の理解と造形表現・音楽表現	
第2回	音楽①子どもと音楽表現	（手あそび、歌あそび、音域、わらべうた遊び）
第3回	音楽②環境と音	（音MAPづくり　聴く・感じる・オノマトペでの表現・音あそび）
第4回	音楽③身体で音遊び	（自ら創り出す音を生かした表現・音楽に合わせた身体表現）
第5回	音楽④声を合わせる	（言葉の意味や情景が伝わるような表現豊かな歌唱表現の獲得）
第6回	音楽⑤楽器あそび	（自由に楽器で応答的な表現を楽しむ。合奏で心を通わせる）
第7回	音楽⑥絵本と音楽	（絵本と音楽による表現の紹介と実践）
第8回	音楽⑦音楽遊びの展開	（子どもの発達に即したリズム遊びの展開例を考える）
第9回	造形①子どもと造形表現	（造形表現の特性と様々な表現内容　見る・触る・感じる・考える）
第10回	造形②形について	（形の発見と表現の獲得　探す・集める・選ぶ）
第11回	造形③色について	（色との出会いからイメージの広がりを確かめる）
第12回	造形④緑地の散歩を通して	（五感を生かした感性の発見と、美しき自然との出会いを考える）
第13回	造形⑤日用品（廃品）との出会い	（素材の可能性を見出しイメージに結びつける取り組み）
第14回	造形⑥イメージを造形する	（心情や情景などを身の回りの形や色を構成して表現する）
第15回	造形⑦造形遊びの展開	（子どもの発達に即した造形遊びの展開例を考える）

いずれにせよこの授業では、美しく歌うことや上手に絵を描くことではなく、「コミュニケーションの手段としての『表現』」[2)]を目指し授業を実践していく。

（2）「子どもと表現」の受講者に、授業最終回にアンケート調査を実施する。本調査は本学研究倫理審査委員会の審査を経たものである（2019年6月26日承認、研倫審・2019－13号）。なお、設問Ⅱの記述内容に対しては、KH Coder（樋口、2014）の共起ネットワーク図を用いて音楽表現・造形表現それぞれの分析を行う。

2－2. 対象者及び実施日・実施場所

対象者：T短期大学児童教育学科1年生
　　A・Bクラス　59名
授業実施期間：2019年4月9日～7月30日
アンケート実施日：7月30日
実施場所：音楽室及び造形室

2－3. アンケート内容（資料1）

設問Ⅰ：授業の到達目標5項目に対する理解度を5段階で選択し、その理由を自由記述する。

設問Ⅱ：音楽表現・造形表現それぞれの「演習を通じて自分自身が変化したと思うこと」「演習を通して見つけることができた今後の課題」について、自由記述する。

3. 結果と考察

3−1. アンケート調査の結果と考察

アンケート調査実施の際には、受講者に研究の趣旨説明等を行い、インフォームドコンセントで研究への承諾を得た。調査紙は名前を消去し個人が特定されないよう配慮した上で扱った。

3−1−1. 到達目標（1）領域「表現」の位置づけや内容について実践を通して理解する

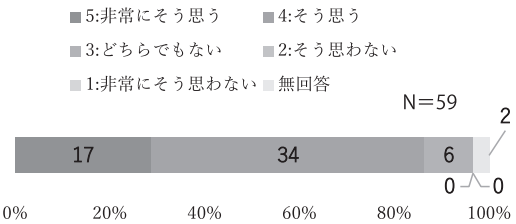

図1　到達目標（1）の自己評価

表2 回答例（1）

評定値4以上の記述	評定値3の記述
・音楽や造形で実際に歌ったり、作ってみたりしたのでわかりやすかった。理解できた。 ・表現することの重要性を音楽、造形を通してわかった。 ・将来にそのまま活かせると思ったから。	・まだしっかり理解できている自信がない。 ・子どものことを理解して楽しんでいたかどうかは分からなかった。 ・よく分からない時もある。

評定値による受講者の評価は図1のとおりであった。自由記述では回答48名中、最も多かった内容が「実践」に関するもので58％であった。その他の内容は「表現」に関するもの25％、将来のこと・保育現場を想定したもの17％であった。

評定値4以上の記述は実践を通して学んだ内容が多くを占めていた。評定値3の記述は「理解についてまだ自分に自信がない」「よくわからない」という内容であった。評定値2以下を選択した受講者はいなかった。

これらの回答から、座学ではなく実際に表現活動を行う授業内容を通して、到達目標（1）「表現活動について、実践を通して理解する」は多くの受講者に伝わっていたが、「理解」という言葉の捉え方について、更に説明が必要であることがわかった。

3−1−2. 到達目標（2）「子どもの表現する姿や、その発達について理解する」

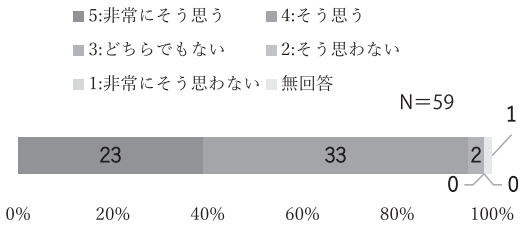

図2　到達目標（2）の自己評価

表3 回答例（2）

評定値4以上の記述	評定値3の記述
・実際に活動したことで、この作業は難しいかな？こんなことなら表現できるかな？などと具体的に考えられるようになった。 ・活動時に子どもの姿がこうで、とアドバイスをたくさんしてくれたので学びやすかった。 ・実際にスカーフを使った表現であったり、子どものお面づくりなど、現場で活かせるように想像しながらできた。	・一回行ってみないとわからない。 ・あまりわからん。

評定値による受講者の評価は図2のとおりであった。自由記述では回答48名中、最も多かった内容が「子どもの発達」に関するもので50％であった。その他の内容は「子どもの表現する姿」31％、「授業内容について」17％、「将来に関するもの」2％であった。

評定値4以上をつけた受講者の「子どもの発達」と「子どもの表現する姿」の記述を合わせると約81％となり、多くの受講者が到達目標（2）の理解を深めたと思われる。評定値4以上では「実際の活動での子ど

もの反応に関するエピソード紹介」が参考になったという記述があった一方で、評定値3では「理解」についての自己評価に迷いがある記述であった。評定値2以下を選択した受講者はいなかった。

これらの回答から、到達目標（1）同様、「理解する」「わかる」という言葉をどのように捉えるかという受講者と教員の共通理解の必要性がみられた。「わからない」については、本授業では実際に子どもと関わって活動していないことから、子どもに接してみないとわからないのは妥当な意見である。映像で子どもの姿を見せたこともあったが、それに関する記述はなく、エピソード紹介に関する記述はあったことから、ロールプレイング等で実際に動いた経験の方が受講者の印象に残ったといえる。子どもの姿や発達の理解を促す授業内容の工夫がさらに必要であると思われた。

3−1−3. 到達目標（3）「表現活動を横断的に捉えながら、子どもの表現を支えるための感性を豊かにする」

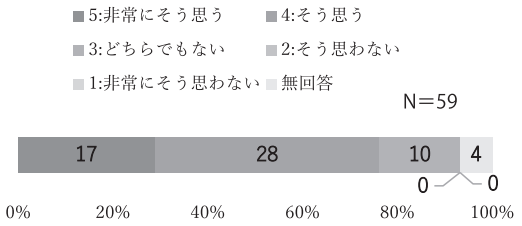

図3　到達目標（3）の自己評価

表4　回答例（3）

評定値4以上の記述	評定値3の記述
・自分たちが行うことで、子どもに楽しさを伝えて支えることができると思ったから。 ・感性を豊かにすることで、色々な角度からの視点などが増え、表現力が広がっていくなと思いました。 ・造形の中にも音があったり、音の中にも見えない形がある。	・今はまだ自分のことに精いっぱいで、子どもを支えるという考え方にまで至らなかったです。 ・感性が豊かになったとは何も感じていない。 ・意味がよく理解できなかった。

評定値による受講者の評価は図3のとおりであった。自由記述では回答39名中、最も多かった内容が「感性」に関するもので85％、次いで「表現活動を横断的に捉えること」13％、「理解について」2％であった。

評定値4以上では「感情が豊かになった気がする」「自分の想像力が広がった」等、「感性」について理解を深めたと思われる記述が複数みられたが、評定値3以下では、子どもを支えることに関する消極的なものと、感性が豊かになっていないというものであった。評定値2以下を選択した受講者はいなかった。

これらの回答から、多くの受講者の理解が得られたものの、「感性が豊かになる」「横断的」について丁寧な説明が必要だと思われた。アンケート実施時に「横断的」という言葉が難しいという意見があり口頭で説明を加えたが、この項目の自由記述数が他に比べて少なかったことから、言葉の親しみ難さが、受講者の意識付けを遠ざけたとも考えられた。授業では音楽+言葉+身体表現、造形+自然+五感等、横断的な活動を行っていたが、受講者の理解を促す機会を増やす必要性がみられた。

3−1−4. 到達目標（4）「自由に表現し、人の表現を受け止め、共感することができる」

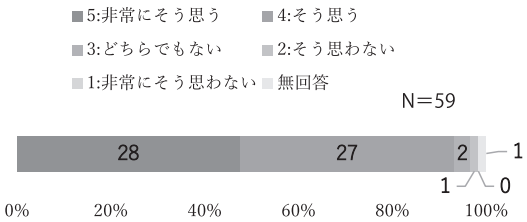

図4　到達目標（4）の自己評価

表5　回答例（4）

評定値4以上の記述	評定値2の記述
・表現の仕方や受け止め方が豊かになってとても良かったと思いました。 ・各グループの活動の中で、人それぞれの表現の違いがあっておもしろかった。 ・人の表現を共感でき、自分達もその表現を取り入れようとする時もあったから。	・表現は人それぞれだから共感は難しい。

評定値による受講者の評価は図4のとおりであっ

た。自由記述では回答47名中、最も多かった内容が、到達目標前半「自由な表現・表現の受け止め」に関するもので72％であった。次いで多かった内容は到達目標後半「共感すること」で28％であった。

評定値4以上では、多くの受講者が他者の表現を受け止め共感し、自分たちの発表に反映させるなど、お互いを高めあう内容であった。評定値3と1を選択した受講者はいなかった。評定値2を選択した受講者の記述は「表現は人それぞれだから共感は難しい」というものであった。

これらの回答から、到達目標の内容を多くの受講者が理解した様子が窺えた。しかし、共感できないという記述もみられたことから、受講者同士の対話を充実させることが検討課題といえる。

3−1−5.　到達目標（5）「さまざまな表現の基礎的知識や技能を生かし、子どもの表現活動に展開させることができる」

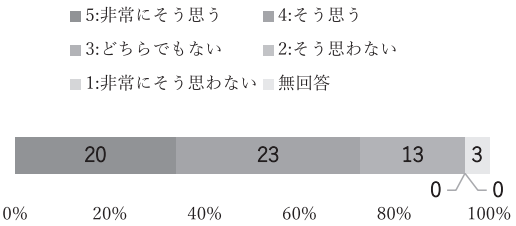

図5　到達目標の自己評価（5）

表6　回答例（5）

評定値4以上の記述	評定値3の記述
・いろんな表現を学び、保育者になったら生かせる活動がたくさんあったから。 ・知識や技能が全くない状態で展開させるのと、基礎を活かして表現する活動は仕上がりが違うと思った。 ・自ら遊びの内容を考え、実践することで、力がついた。	・まだまだ子どもに教えるという知識がないから身につけたい。 ・何歳はどんなことができる、どんなことが好きという知識がまだ足りていないなあと思います。 ・あまりよくわからない。

評定値による受講者の評価は図5のとおりであった。自由記述では回答39名中、最も多かった内容が、到達目標前半「さまざまな表現の基礎的知識や技能を生かす」に関するもので54％であった。続いて到達目標後半「子どもの表現活動に展開させることができる」に関するものが23％、今後の課題13％、その他10％であった。

評定値4以上の記述からは「知識や技能」という言葉から「将来保育者になるために必要」と関連づける記述が複数みられた。評定値3の記述数は、到達目標五項目の中では最も多く、内容は受講者が「自分には知識や技術がまだ備わっていない・よくわからない」というものであった。評定値2以下を選択した受講者はいなかった。

これらの回答から、「展開」という言葉の選び方にも一考の余地があったと考えられる。「子どもと表現」の授業内容は、領域「表現」の基盤となる考え方を学ぶものであり、この授業だけで完璧を求めるものではない。授業で得た内容や課題を出発点として、保育内容の各科目を学びながら、受講者それぞれが、保育者として必要な知識や技能をさらに修得していくことになる。今後ガイダンスで解説や言葉の定義など、共通理解を促していくことや、活動の捉え方について助言していくことが、受講者の戸惑いを減らし、学びを深めることに繋がると思われる。

3−2.「設問Ⅱ」の結果と考察

設問Ⅱでは、(1)「演習を通じて自分自身が変化したと思うこと(2)「演習を通して見つけることができた今後の課題」について、受講者から得た回答に対し、KH Coderによる分析を行った。

3−2−1.「演習を通じて自分自身が変化したと思うこと」

(1) 音楽表現

音楽的な視点から受講者の授業後の変化に着目すると、大きく「人前」という特徴語が現れた。そこから上部に配置された特徴語の多くからは、「最初は

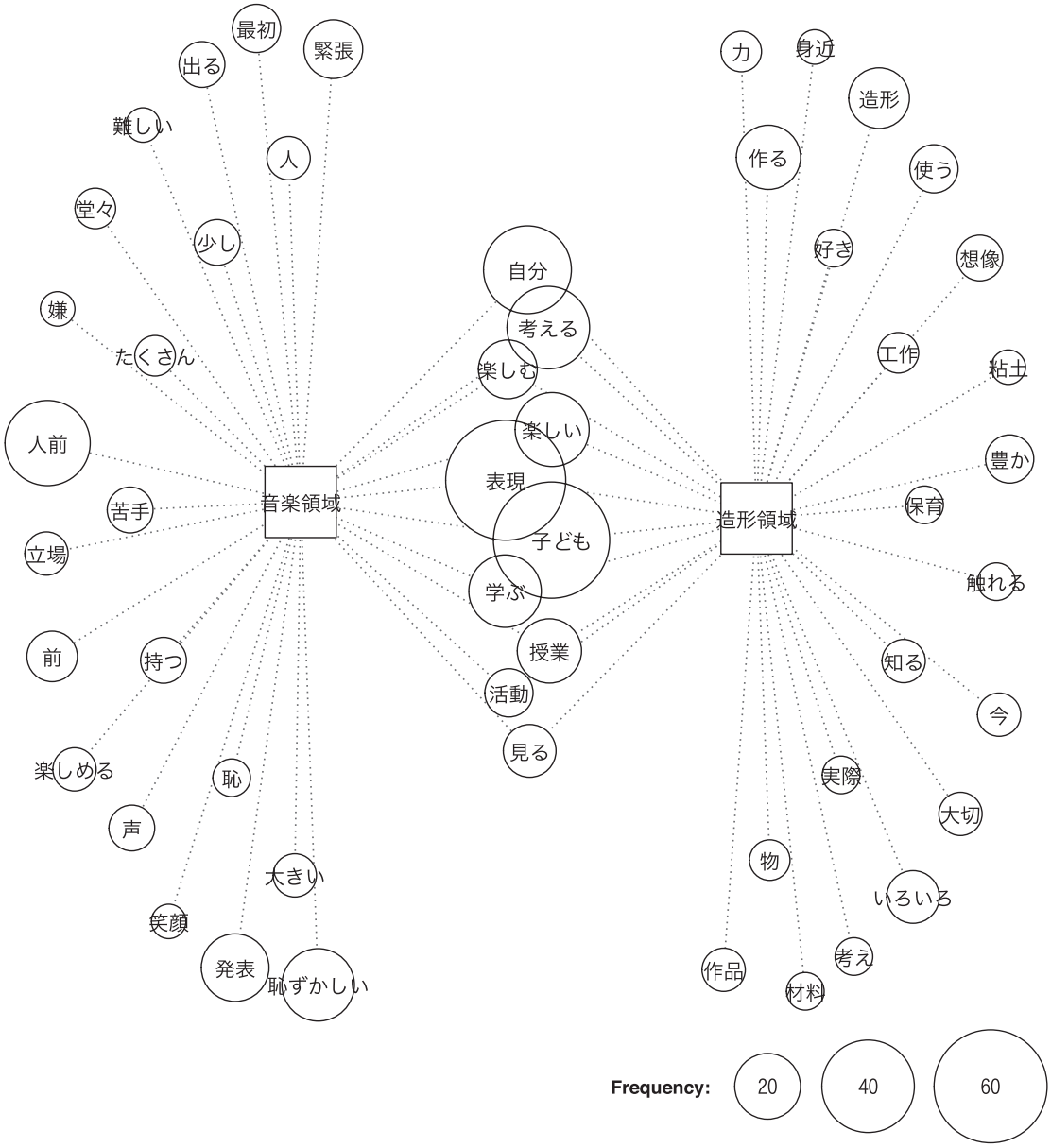

図6　共起ネットワーク図（変化したと思うこと）

人前に出て自分を表現することに緊張した･嫌だった･苦手だった」という「授業開始初期」の受講者の戸惑う姿が浮かび上がった。

「少し」「恥」「堂々と」「笑顔」「大きい」等の特徴語からは、「苦手意識が少しなくなった」「前より恥を捨て、楽しんで発表できるようになった」「恥ずかしさが少なくなり、堂々と表現できるようになってうれしかった」「最後の方は笑顔で話せるようになった」等、授業実践後の受講者の成長と進歩が示された。

また、「立場」「楽しめる」という特徴語は、「子ども」という語とつながり「子どもの立場になって考えることが多くなった」「どうしたら子どもが楽しめるのかを考えるようになった」等、子どもの立場を意識するようになったことが窺える。

「人」という特徴語を含む記述からは「人の表現を見て、こんなのもいいな、と新たな発見があった」「表現の仕方は人それぞれで、人の発表を見るのが楽しかった」「人の話を聞く態度や受け取り方が意識一つで大きく変わった」等の記述がみられた。

以上のことから、音楽表現領域での演習を通して受講者が変化したことは、大きく(1) 苦手意識から離れて少しずつ表現を楽しむようになった(2)「子どもの立場」を考えるようになった(3) 他の表現を受け止め認め合う姿勢が生まれた、の三点であることが明らかとなった。

(2) 造形表現

造形的な視点から受講者の変化に注目してみたい。造形領域での記述から分析された特徴語には、「いろいろ」「材料」「作品」「工作」「物」「造形」など物質性を示す特徴語と、「想像」「考え」等の精神性を示す特徴語、「使う」「作る」「触れる」「知る」等の自分の感覚や所作を示す特徴語の3つのグループに分けることができる。

それぞれ具体的な記述を見ると、物質性を示す特徴語では「手で触る感覚や、使う材料によっていろんな模様を付けたり、いろいろな楽しみ方を見出すことができた」「物を見立てる力、物を作ることのレパートリーが増えた」等の記述があった。造形表現する場面を経験して、その形や色、素材、技能に対してその多様な状況を知識として深める姿がみられた。

精神性を示す特徴語では、「感じたことや考えたことを表現する。そこから豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにする」「想像力や思考力が前よりしっかりと付いたかなと思いました。」等の記述があった。受講者自身が造形的に思考することで、自分なりに発想・構想する姿などがみられた。

自分の感覚や所作を示す特徴語では、「手で触る感覚や、使う材料によっていろんな模様をつけたりいろいろな楽しみ方を見出すことができた」「見る、においをかぐ、触れる、聞くなど身近な感覚を使って体全体で楽しむことができれば、子どもの豊かな感性や表現する力が養われると思う」等の記述があった。感覚を使って環境を捉え、自分の表現に発展するプロセスを意識している姿がみられた。

以上のことから、演習の中で受講者が表現を楽しみ、その本質に触れて理解を深め、受講者自身の内面の豊かさに気がついていることがわかった。

(3) 総合的な考察

音楽領域と造形領域の間には、大きく「表現」「子ども」といった特徴語が示され、他の特徴語と関連して用いられていた。「いろいろな表現をして、子どもがどう楽しめるか考えることができた」「子どもに興味を持ってもらえる活動を保育者が計画する事が必要になると思った」等の記述からは、子どもとの関係性を意識して振り返っている様子がみられた。

「見る」では、「他の人の班の作品を見るのもとても楽しかった」「みんなの発表を見るのが楽しみで、自分の番になってもドキドキせずにできるようになった」等、他者の表現を楽しむ姿がみられた。

「楽しむ」「楽しい」の区別については、前者は楽しんでいる自分に関する記述で用いられ、後者は子どもの楽しむ姿や表現の楽しさに関する記述で用いられる違いがあった。

以上の結果から、研究方法2－1.で示していた「表現を受け止めあう」「自分なりの表現に気付く」「コミュニケーションとしての表現活動」について、受講者が着実に学び取っていたことがわかった。

3−2−2.「演習を通して見つけることができた今後の課題」

(1) 音楽表現

音楽的な視点から受講者の課題に着目すると、「変化」における「人前」のような目立った特徴語はみられず、ほぼ均等に配置されていた。それらは大きく2つのグループに分けられた。一方は「手遊び」「ピアノ」「レパートリー」「覚える」「実習」「増やす」等の特徴語や「実習で使える手遊びを増やす」「ピアノは簡単なものは覚えて弾けるようにする」「手遊びや絵本のレパートリーを増やすこと」といった記述から示されるように、「実習に向けて身に着けたい、具体的な技術」であった。もう一方は「声」「大きい」「緊張」「説明」「工夫」「合わせる」等の特徴語や「大きな声で話す」「緊張を克服する」「子どもに、わかりやすく説明できるようにしたい」「自分なりに工夫できるようになりたい」

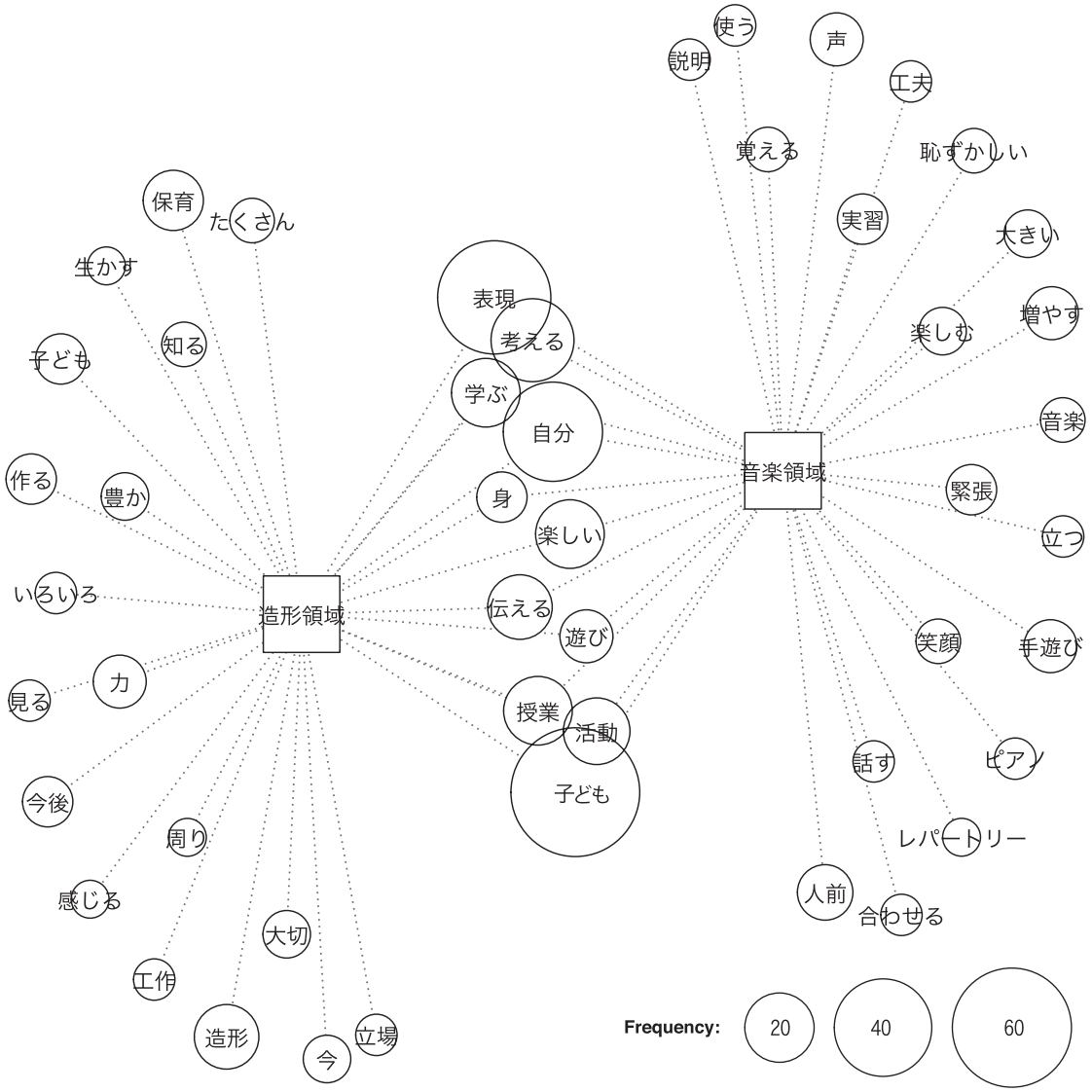

図7　共起ネットワーク図（今後の課題）

「子どもに合った表現活動を提案できるようにしたい」等の記述から示されるように、「演習活動から見出した課題」であった。

以上のことから、受講者が実習を見据え、短期的に技術獲得を、そして長期的には保育者として子どもの個性や発達に応じて表現することを今後の課題としている様子が見いだせた。

(2) 造形表現

造形的な視点から受講者の課題に注目してみたい。造形領域での記述から分析された特徴語には、「工作」「造形」等の物質性を示す特徴語と、「保育」「立場」等の子どもとの関係性を示す特徴語、「作る」「見る」「感じる」「知る」「生かす」等の自分の感覚や所作を示す特徴語の3つのグループに分けることができた。「演習を通じて自分自身が変化したと思うこと」に比較して精神性を示す特徴語がなくなり、子どもとの関係性を示す特徴語が現れていた。

物質性を示す特徴語では、「子どもに合わせた工作を考える」「造形表現で学んだことを忘れず、発展したことを学ぶ」等の記述があった。具体的な目標を展望する姿がみられた。

子どもとの関係性を示す特徴語では、「実際の保育者の目線がどこにあるのか学ぶ」「この授業では、子どもの立場になることを学びました」等の記述があった。自分の感性ではなく、子どもの成長を見据えたアイデアを見出した姿が窺えた。

自分の感覚や所作を示す特徴語では、「絶対に完成形は作らず子どもの個性や発想力を生かせる保育者になりたいです」「いろいろなものと触れ合い、五感を使って感じ、表現する力を身につけたい」等の記述があった。将来自分が保育する姿、保育のための資質の向上など、より先の未来へ臨む受講者の様子がみられた。

以上のことから、受講者が感じた学習成果を、記述内容から具体的に把握することができた。

(3) 総合的な考察

音楽領域と造形領域に重なる特徴語は、「演習を通じて自分自身が変化したと思うこと」に似ていたが、記述内容での使われ方は、異なっていた（図6、図7）。同様に「表現」「子ども」を探ると、「子どもにとって一番大切なことは表現だと思った。表現ができる子どもは自分をよく理解していると思う」「自分がうまく表現できなければ、子どもに表現することの楽しさを伝えることはできないと思う」などの記述があった。活動や学習の延長に子どもの姿を見通して、彼らとの対話をイメージしている姿が多数であった。

新しく特徴語として現れた語もあった。「遊び」は表現、活動を一括りに捉える用法で、「伝える」は楽しさや面白さの伝え方について考えていた。「身」では、身に付けるという用法で保育技術、表現力など具体的な目標を掲げていた。

以上の結果から、受講者が「子どもに伝わる表現の難しさ」「子どもに楽しんでもらう表現活動」「子どもの発達や個性に合せようとする姿勢」について、受講者ごとに個別の課題を見出していたことがわかった。

4. まとめと今後の課題

本研究では、「子どもと表現」の実践的授業を通して、受講者が領域の基盤となる考え方を得られたか、どのような学びを得たのかを、到達目標の達成度から調査することにより、授業改善の課題を探ることが目的であった。調査から得られた受講者の姿は以下のとおりである。

(1) 到達目標に対する達成度は高い

調査の結果、受講者の授業の到達目標に対しての達成度は高く、評定値2や1がほとんど無かったことから、実践的授業の意義は伝わっていた。

(2) 実践的授業を通して受講者が「子ども主体」で考えるという変化がみられた。

(3) 当初人前での発表を嫌がっていた受講者が、授業を経て発表について工夫する姿がみられた。

(4) 演習中、他者との共感を通じて積極的に学ぶ姿がみられた。

(5) 学習内容の成果を基に、今後の目標を再設定する姿がみられた。

次に、結果から見出すことのできた改善点は以下のとおりである。

(1) 使用する文言の共通理解

到達目標に使用されている「理解」「感性」「横断的」等、その言葉が示す意味について、共通理解の機会を増やすことで、受講者の学びが深まるよう促していく。

(2) 子どもの発達に対する理解

授業実践で受講者が得た子ども理解は、自ら表現する活動や、エピソード紹介、子ども時代を振り返っての感想であり、発達を理解したことにどのように繋がっているか不明瞭であるため、子どもの姿を頻繁に紹介するなどの改善を加えていく。

(3) 対話を増やす

「表現を受け止める」「共感する」ことに達成感を獲得した受講者が多い反面、共感できない場合を想定した対応も必要であることがわかった。受講者同士の対話を取り入れることが検討すべき点である。

実践的授業を通して得た受講者それぞれの課題は、それが基盤となり、その先に続く保育内容の各科目や教育実習等で発展的に学び続けていく原動力となると考える。現在「子どもと表現」は、オムニバス授業を行っているが、音楽表現と造形表現を組みあわせた活動を最終回に取り入れるなど、受講者が幅広く表現活動ができるように工夫することも今後の課題としたい。

引用・参考文献

1) 樋口耕一 (2014)：『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―』ナカニシヤ出版

2) 平田智久・小林紀子・砂上史子編 (2010)：『最新保育講座⑪保育内容「表現」』ミネルヴァ書房, p. 7

3) 保育士養成課程等検討会 (2017)：保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について https://www.hoyokyo.or.jp/http:/www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/29-3s2.pdf (2020/1/5確認)

4) 保育教諭養成課程研究会 (2017)：平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究―幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える― http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm (2019/11/25確認)

5) 保育教諭養成課程研究会編 (2017)：『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』萌文書林

6) 厚生労働省 (2017)：『保育所保育指針』(平成29年告示)

7) 文部科学省 (2017)：『幼稚園教育要領 (平成29年告示)

8) 中川智之・橋本勇人・入江慶太・尾﨑公彦・笹川拓也・大江由美・三宅美智子・重松孝治・橋本彩子・岡正寛子・種村暁也 (2018)：幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」に求められる授業内容に関する一考察―保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとして―　川崎医療短期大学紀要38　pp. 63－69

9) 劉麟玉・宮下俊也・宇田秀士・横山真貴 (2018)：教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成 (5) ―「表現」に関わる教育内容研究知見に依拠して―　次世代教員養成センター研究紀要4　pp. 259－265

10) 山野てるひ・岡林典子・ガハプカ奈美 (2010)：音楽と造形の総合的な表現教育の展開―保育内容指導法 (表現) の授業における「音環境を描く」試みから―　京都女子大学発達教育学部紀要第06号　pp. 47－59

付記

本稿の執筆において、研究代表者の三好は1、2、3-1、3-2-1 (1) (3)、3-2-2 (1)、4および全体の調整を担当し、共同研究者である渡邊は2-1 (1)、3-1、3-2KHCoderによる分析、3-2-1 (2) (3)、3-2-2 (2) (3) を担当した。

資料1　アンケート用紙

【アンケート協力依頼】子どもと表現受講者各位　7月30日実施

研究課題：教科「子どもと表現」におけるポートフォリオを活用した授業研究
東京女子体育短期大学　児童教育学科　三好優美子　渡邊洋

目的

新科目「子どもと表現」実施にあたり、学生の到達度等を確認した上での
音楽表現・造形表現における学生調査を通して、更なる授業改善を探るため。

計画（調査内容）

授業15回目のアンケート調査にて、学生の到達度や音楽表現、造形表現の授業内容について調査を行う。

無記名によるアンケート調査となります。
自由意思による調査協力をお願い申し上げます。
個人を特定した分析を行うことはありません。また授業の評価に影響を与えるものではありません。
本調査研究に同意される場合、アンケート記入のうえ教室の外に設置する段ボールの箱に入れてください。

本研究の成果は、本学研究紀要第55号（2020年3月）に投稿を予定し掲載される可能性があります。

++

これは「子どもと表現」のシラバスに案内した、授業概要と到達目標です。これを参照した後で、次頁からはじまる設問に順次回答してください。また、他の授業の成果や内容とは明確に区別をして回答してください。

【子どもと表現】2019年度前期シラバス

◆ 授業の概要
保育所保育指針における領域「表現」の保育内容やその位置づけについて理解する。子どもの発達、子どもが表現する姿、表現を促す要因等について実践的に学び、子どもの感性や創造性を育むための知識・技能・表現力を身につける。
◆ 授業の到達目標（ＤＰで目指す資質・能力）
「音づくり」「ものづくり」に関して、以下の内容を目指す。 1．領域「表現」の位置づけや内容について実践を通して理解する。 2．子どもの表現する姿や、その発達について理解する。 3．表現活動を横断的に捉えながら、子どもの表現を支えるための感性を豊かにする。 4．自由に表現し、人の表現を受け止め、共感することができる。 5．さまざまな表現の基礎的知識や技能を生かし、子どもの表現活動に展開させることができる。

【アンケート協力依頼】子どもと表現受講者各位　7月30日実施

Ⅰ．この授業に5つの到達目標があります。それぞれ到達したかどうか、自己評価してください。またその理由について教えてください。

1、領域「表現」の位置づけや内容について実践を通して理解する。　☑を入れてください

□ 非常にそう思う　□そう思う　□どちらでもない　□そう思わない　□ 非常にそう思わない

どういう理由でそう考えたのか具体的に教えてください。

（　　）

2、子どもの表現する姿や、その発達について理解する。　☑を入れてください

□ 非常にそう思う　□そう思う　□どちらでもない　□そう思わない　□ 非常にそう思わない

どういう理由でそう考えたのか具体的に教えてください。

（　　）

3、表現活動を横断的に捉えながら、子どもの表現を支えるための感性を豊かにする。　☑を入れてください

□ 非常にそう思う　□そう思う　□どちらでもない　□そう思わない　□ 非常にそう思わない

どういう理由でそう考えたのか具体的に教えてください。

（　　）

【アンケート協力依頼】子どもと表現受講者各位　7月30日実施

4、自由に表現し、人の表現を受け止め、共感することができる。　☑を入れてください

☐ 非常にそう思う　☐そう思う　☐どちらでもない　☐そう思わない　☐ 非常にそう思わない

どういう理由でそう考えたのか具体的に教えてください。

(　　)

5、さまざまな表現の基礎的知識や技能を生かし、子どもの表現活動に展開させることができる。
☑を入れてください

☐ 非常にそう思う　☐そう思う　☐どちらでもない　☐そう思わない　☐ 非常にそう思わない

どういう理由でそう考えたのか具体的に教えてください。

(　　)

Ⅱ．この授業では「音づくり」「ものづくり」、音楽表現と造形表現の2つの演習活動から学びました。そこで、「自分自身で成長したと思うこと」と「今後に向けた課題になったこと」をそれぞれ教えてください。

音楽表現の演習を通じて、自分自身が変化したと思うこと

(　　)

【アンケート協力依頼】子どもと表現受講者各位　7月30日実施

音楽表現の演習を通じて、見つけることができた今後の課題とは

（　　）

造形表現の演習を通じて、自分自身が変化したと思うこと

（　　）

造形表現の演習を通じて、見つけることができた今後の課題とは

（　　）

ご協力をありがとうございました。